

徒然なるままに…55

-全体授業研⑦…「関係(つながり)」から考える社会科授業-

平成29年2月16日
白島小学校 研修部

やっと出せました!

はじめに

早いもので、もう2月も半ばを迎えました。びっくりするのは、卒業まで20日余りなことです。いまだ、子どもらしき満載の6年の子どもたちも、この期に及んで、まだまだ、いくつもの取組を仕掛けようとして、いる6年の担任にも、その自覚は、まったくありません。徐々に「旅立ち」への思いを高めていけることを期待しながら過ごす日々です。



さて、今回の全体授業研は、6年の提案でした。年度始めから大風呂敷を広げつつ、厳しい状況の中で、今回の単元へと落ち着きました。今年度最後の授業研にふさわしい提案になったかどうかは、分かりません。しかし、協議会でもお話したように、①浜井市長を中心に進めた平和記念都市づくりである「表」の復興とともに、政治的な事情で開発が遅れたばかりでなく、様々な課題をはらんだ基町地区の再開発と街づくりである「裏」の復興を取り上げたこと、②基町地区の特殊性から、「多文化共生」の意味を考える入口にすることができたことについて、有意義だったと考えています。

今回は、「関係(つながり)」をキーワードに、本単元を振り返り、社会科授業のあり方について考えたいと思います。

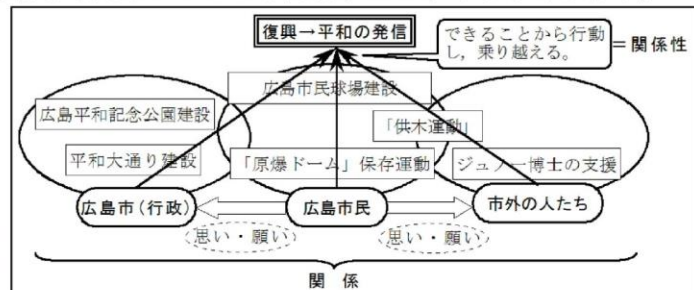
少しでも新鮮なうちお伝えしたかったのですが、あれこれと別件が入ってしまい、着手が遅くなってしまいました。申し訳ありません。少し時間が空きましたので、思い出しながらご一読ください。

1 「関係(性)」を学ぶこと

木村先生が「社会を見る、分かるとは、人と人がつくる関係とその意味を考えること。」と話をされました。

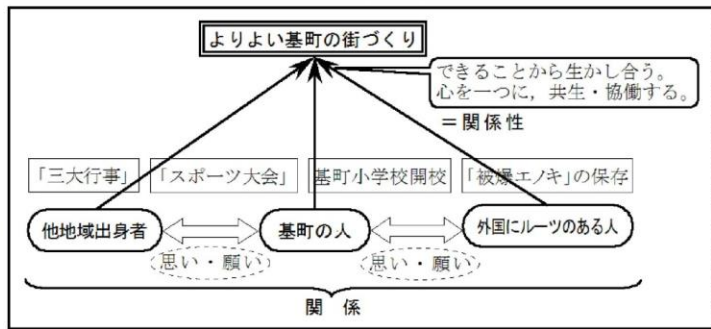
社会科の内容について、指導要領には、社会的事象とその仕組みについて調べ、その意味や特色が分かることと示されています。これは、人が働くために必要な関係を知り、そのつながりのつくり方や関係性を考えることとらえ直すことができるでしょう。

このことを今回の単元で考えてみましょう。広島市の「平和都市」づくりは、人々が「復興と平和の発信」という目標に向かって、「広島市(行政)」、「広島市民」、「市外の人々」といった、それぞれの立場から、力を合わせて取り



[資料1: 広島市の「平和都市」づくりに携わった人たちの関係] 組んでいくという「関係」を形成することによって始めて、成し遂げられたとらえることになるでしょう。(前頁 [資料1])

基町地区における街づくりでは、様々な交流のための活動を仕組むことによって、住民全員を「一枚岩」にし、出身地区、国、世代などの違いから生まれた差やズレを埋め、それぞれの力や意見を生かしていくという「関係」を形成し、みんなで街をつくらうとしてきたとらえることになるでしょう。



〔資料2〕

〔資料2：基町地区の街づくりに携わった人たちの関係〕

これらに共通して流れているのは、市民一人一人が思いや願いを出し合い、できることから行動しながら協力することによって、政治や他の市民を動かし、よりよい社会を創るといふ、行政などの組織をも含めた人々の関係性、意味です。このことが政治や社会づくりの本質に気付くことになると考えられます。

人々は、これまで、よりよい生活や社会にしていくために、様々な仕組みや組織をつくり出してきました。これらの根本は、関係であり、その関係性や意味から、これらがどう働き、どんな生活や社会をつくり出したのかを考察していくのが社会科学であり、その基盤となる社会科の学習なのです。

2 「共生」のためにつくる関係（性）とは

では、「共生」、「協働」するためには、どのような関係（性）をつくり出す必要があるのでしょうか。

木村先生は、「意見を出し合うこと」、「認め合うこと」を示されました。これらには、二つの意味があると考えられるでしょう。

一つは、互いの考え方を突き詰め、意見を練り上げていくことによって、よりよい策や判断を見出すことです。この過程を通して、互いの考え方を知りながら共有化するとともに、策や判断についての合意形成を図ることができるのです。私たちは、この営みを「学び合いのある授業」を通して展開しています。学び合いを通して、「共生」し、「協働」する術を学ぶことになるのです。

「社会的合意形成」という言葉が社会科の中で言われるようになって久しくなりました。価値観の多様化を始め、変動する21世紀の社会において、社会的な論争問題に対して、より合理的な判断をすること以上に、様々な解決策について検討した上で、



折り合いをつけながら、より多くの人々が納得できる解決策へと擦り合わせていくことが求められていると言えるでしょう。これがまさしく、「共生」し、「協働」することなのです。

もう一つは、互いのことを知ることです。まず、互いの考え方やその背景を知ることです。これは、相手の意見や行動のもとになるからです。そこを知った上でかかわることによって、一義的に否定することなく、相手のことを認めることができます。これは、第54号の「LGBT研修」の振り返りで述べた、「知る」ことで、ステレオタイプのなとらえ方から、多様な特性を理解することができるという話とつながっ

ています。

そして、互いの特性やよさを見つけることです。これらを知ることを通して、いろいろな場面で、それぞれの特性やよさを生かし合いながら共に取り組むことができ、互いのことを尊敬し合いながら、大切にすることができると考えられます。

今回、改めて、「共生」の意味を考えてみましたが、すべてを分かり、認めて共に生きていくことは、極めて難しいことのように思います。なぜなら、考え方や行動のベースとなる文化が一人一人違うからです。とすると、互いの文化を、違いとして理解し、互いの特性やよさを生かし合いながら、できることから行動すること、すなわち、「協働」することが「共生」する意味なのではないでしょうか。皆さんは、どう感じられましたでしょうか。

おわりに一授業力を高め続けるために

うちの学級通信を添付しました。協議会で、子どもらの振り返りをお伝えするとお話ししたからです。子どもたちは、「心を一つに協力する」、「互いの考えを生かし合う」、「できることから行動する」という、それぞれがつかんだ基町地区の街づくりの意味を、様々なキーワードで表現したように思います。社会科授業において、出会った社会的事象について理解した上で、その意味を表現（再構成）できるようにすることを目指してきた結果の一端を感じることができました。



木村先生が「自分のこととして授業を見ることが出来る教師集団です。」と評価してくださいました。これは、日々授業づくりを進めている仲間同士がそれぞれ、主体的に授業づくりに参画してきたことを褒めてくださったものと考えています。次の号では、授業分析と研究協議のあり方についてお話ししたいと思います。

【 註 】

1 「合意形成」能力育成を目指す社会科授業について、ここで、代表的な文献を挙げておきます。

○ 吉村功太郎「社会的合意形成能力の育成を目指す社会科授業」全国社会科教育学会『社会科研究』第59号，2003。

○ 磯崎育男「合意形成考」『千葉大学教育学部研究紀要』第53巻，2005。

2 内山 節（うちやま たかし）さんを紹介します。

日本の哲学者で、特定非営利活動法人森づくりフォーラム代表理事など。存在論、労働論、自然哲学、時間論において独自の思想を展開されています。

「関係性」についての文献を挙げておきます。

○ 『自然・労働・協同社会の理論 新しい関係論をめざして』農山漁村文化協会，1989。

○ 『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』講談社現代新書，2007。

○ 『シリーズ 地域の再生 共同体の基礎理論—自然と人間の基層から』農山漁村文化協会，2010。

○ 21世紀社会デザインセンター編『内山節のローカリズム原論—新しい共同体をデザインする』農山漁村文化協会，2012。